

## ワールドストリートサッカーチャンピオンシップについて

獨協大学国際教養学部言語文化学科 齋藤 彰人

2018年7月18日から7月21日の4日間に渡り、ドイツのプローラにてワールドストリートサッカーチャンピオンシップが開催された。男女合わせて10ヶ国以上の様々な国籍の人々がこの大会に参加し、私達が参加した男性の大会には私達埼玉のチームを合わせて8チームが参加していた。総当たりで予選を行い、その順位に応じた決勝トーナメントの組み合わせのもと優勝を争う。ストリートサッカーは各チーム3人ずつがピッチに入り、サッカーコートが縮小された大きさのコートで行われる。また、この大会の特殊な点は明確な反則の基準が設定されていないことだ。試合中にそれぞれのチームでコミュニケーションをとり、ルールを設定する。この大会では「フェアプレー」をスローガンとして掲げている。そのため通常のサッカーとは異なりフェアプレーポイントというものが存在し、それも試合の結果に影響する。フェアプレーポイントは、各チームが試合開始時に6ポイントずつ保持し、反則を重ねるごとに減点され、試合後に大会スタッフと両チームとの確認を経て確定される。

この大会は勝ち負け以外に国際交流を目的としている。各チームと真剣

にサッカーをした後に様々なコミュニケーションをとることができた。大会期間中は基本的に全て英語でコミュニケーションをとることとなるのだが、中には英語を話すことができない国の選手たちもいた。しかし理解できる少ない単語を羅列したり、ボディランゲージを使用することでコミュニケーションをとることができた。例としてチリのチームとのコミュニケーションがある。宿泊先のホステルで私達の部屋の隣の部屋をチリのチームが利用していた。これがきっかけでコミュニケーションをとり、両国から持参したお土産を交換しあった。チリの母語はスペイン語で、彼らのうち1人しか英語を話すことができなかった。しかし、私達は大学でスペイン語を学んでいたため、たどたどしいスペイン語ではあるが英語と織り交ぜながらなんとかコミュニケーションをとることができた。このおかげで意気投合し、チリのチームから一緒に食事しようと誘われ、一緒に食事に行った。後にチリの選手が書いてくれたメッセージの「言葉の壁は存在しなかった、ありがとう」という言葉にもあるように、言葉が正確に通じなくてもそれぞれの国を紹介しあったり、様々コミュニケーションをとることができた。これはチリの人々との一例だが、4日間で多くの国の人々とコミュニケーションをとることができ、非常に貴重な経験となった。

また、開会式では私達は日本から持参した着物と甚平を着用してステー

ジに上がった。司会者からはとてもクールな文化だというコメントを頂き、日本の文化を紹介、また興味を持ってもらうことができた。また大会期間中には2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックのピンバッチや埼玉県草加市の名産である草加煎餅を配って歩いた。海外の人々が持つ日本のイメージは侍や寿司等が先行しているが、現代の日本や、東京や京都だけでなく埼玉のような各地方の特色や素晴らしさも今後より発信していきたいと感じた。

大会の結果としては、予選は6位で終え、決勝トーナメントベスト8で敗退となった。結果は悔しいものとなってしまったが、結果以上に多くの得るものがあった。試合前や試合後に相手チームと握手を交わす場面や試合後にお互いを称え合いコミュニケーションをとる場面では、人種や国籍、言語の隔たりなど存在しないように思えた。試合以外の会場やホテルですれ違うときにも多くの会話や握手等コミュニケーションがあった。また、予選の最終戦では前日に私達がゴミ拾いを自主的にしたことのでフェアプレーポイントが1ポイント追加された。

私は以前より国際交流に非常に興味があり、サッカーも長年続けていた。その興味を置いている2つの分野で同時に貴重な体験ができるということでワールドストリートサッカーチャンピオンシップ派遣に応募したの

だが、国際交流とサッカーだけでなく他にも多くのことを体験することができた。特にコミュニケーションという点において他ではできない体験をした。短い大会期間の中、言語が正確に通じなくても同じ競技をプレーし、友人関係になることができた。また、各国の人々それぞれが自分の生まれ故郷に誇りを持っているのだとも感じた。日本に居続けると分からないが、日本を離れると理解することができる日本独自の文化や社会構造がある。外側から見つめなければ気づくことのできない自国の文化はとても興味深く感じた。また、現代社会はグローバル化しているが、その末端は個人間のコミュニケーションにある。この度の経験で正確に言葉を伝えることが出来なかったことから、言語能力の必要性を再認識することができた。これからのグローバルな社会に貢献していくためにも言語能力を磨いていきたい。

私はこれらの貴重な経験をさせて頂いた埼玉県に感謝すると共に、今後の社会への貢献のために努力していきたいと強く思う。